＜実践報告＞

体育授業における「指導ことば」に対する視点の育成
－教科教育科目におけるｅラーニング活用の効果－

藤田育郎　　信州大学学術研究院教育学系
岩田　靖　　信州大学学術研究院教育学系

Improvement of "Instructional Words" in Physical Education Class
－Effect of e-Learning in Subject Teaching Method Course－

FUJITA Ikuro: Institute of Education, Shinshu University
IWATA Yasushi: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	体育指導において，すぐれた教授技術の一つとして挙げられる「指導ことば」に着目し，それに対する視点の育成を意図した教科教育科目におけるｅラーニング活用の効果を検証すること．
キーワード	模擬授業　相互作用行動　運動観察
実践の目的	教員養成段階の保健体育専攻学生を対象に，運動観察の力を高めるとともに，「指導ことば」についての視点を獲得させること．
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部 3，4 年次生（34 名）
実践期間	2016 年 10 月～2017 年 1 月
実践研究の方法と経過	中等体育科指導法演習の授業で実施した模擬授業において，受講生の「指導ことば」に対する視点を育成する手立てとして，ｅラーニングによって言葉かけの模擬体験を行う「言葉かけチャレンジ」を課題とした．また，模擬授業の前後に実施した「言葉かけ研究会」において，受講生に運動技能の向上に向けた「指導ことば」を考案させ，その内容を比較・分析した．
実践から得られた知見・提言	①ｅラーニングによる言葉かけの模擬体験を行うといった課題は，「指導ことば」に対する視点を育成していく上で効果的であること． ②言葉かけに質的な変容がみられた受講生は，運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であり，それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようと試みていること． ③つまずきの分析が的確であっても，それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようとするところに課題が存在していること．

１．はじめに

体育授業における教師の指導行動は，直接的指導行動，マネジメント行動，観察行動，相互作用行動，以上の四つに大別される．これら「四大教師行動」の中でも，子どもたちの授業に対する満足度と正の相関を有しているとされるのが，相互作用行動である．相互作用行動とは，学習者に対する言葉かけのことを指す．髙橋ほか（1991）や深見ほか（1997）は，体育授業における教師の効果的な相互作用行動を明らかにすることに試みたところ，肯定的フィードバック（賞賛），矯正的フィードバック（助言），励ましといった相互作用行動が，子どもたちから「役に立った」と認識されるものであることを明らかにしている．学習者に対して，的確で伝達性のある相互作用行動（言葉かけ）を営むことが，教師に求められる力量の一つであるといえるだろう．

相互作用行動の中でも，子どもたちの運動技能の向上を直接的に促すためには，運動の出来栄えに関する矯正的かつ具体的なフィードバック（具体的情報を有した助言）が重要となると考えられる．例えば，「もっと腕を大きく振って走ってごらん」「膝を深く曲げてからジャンプしてみよう」といった類の言葉である．このような具体的情報を有した助言を学習者に提示することが，運動技能の向上に貢献すると考えられている．しかしながら，「生徒の動きを的確に変えるには，説明的な言葉での指導だけでは不十分で，生徒の感覚に訴える指示の言葉が必要」と小林（2000）が指摘しているように，矯正的かつ具体的フィードバック（具体的情報を有した助言）の内容が子どもにとって感覚的に理解できるものであり，運動課題を解決するためのイメージを膨らませることができるものであるかどうかが重要となる．

このような子どもの感覚に訴えかけたり，運動課題の解決に向けたイメージを膨らませたりすることができる言葉は，しばしば「指導ことば」と表現され，すぐれた教授技術の一つとして挙げられる．例えば，マット運動の前転を行う際に「背中を丸めて回ってごらん」といった動きの改善を直接的に示した言葉よりも「ダンゴムシのように丸まって転がろう」と表現した方が子どもたちのイメージが膨らみ，運動技能の向上により有効に機能するといったことである．このような比喩を用いた表現に加え，「フワッとしたボールを返球してみよう」といった擬音語を用いたり，「タン・タン・タ〜ンのリズムで踏み切ってごらん」といったリズムに着目した言語を用いたりすることは，運動課題の解決に向けたイメージを膨らませることに有効に機能すると考えられる．

しかしながら，このような「指導ことば」を用いるためには，教師自身の運動観察の力や運動構造についての理解といった専門的な力量が求められるといえよう．なぜならば，運動課題の遂行にかかわる学習者のつまずきを見出し，それを適切な運動技能へと修正しようとするプロセスにおいて，的確な「指導ことば」が生み出されると考えられるからである．そこで本研究では，教員養成段階の保健体育専攻学生を対象とした，「指導ことば」に対する視点の育成を意図した教科教育科目におけるｅラーニング活用の効果について検証することを目的とした．

２．研究方法

2.1　対象

2016 年度に信州大学教育学部で開講された中等体育科指導法演習の授業の一部である 6 回の模擬授業と，その前後に実施した 2 回の「言葉かけ研究会」に参加した受講生 34 名を対象とした．対象とした 8 回分の授業展開は，表 1 に示したとおりである．

表１　授業展開

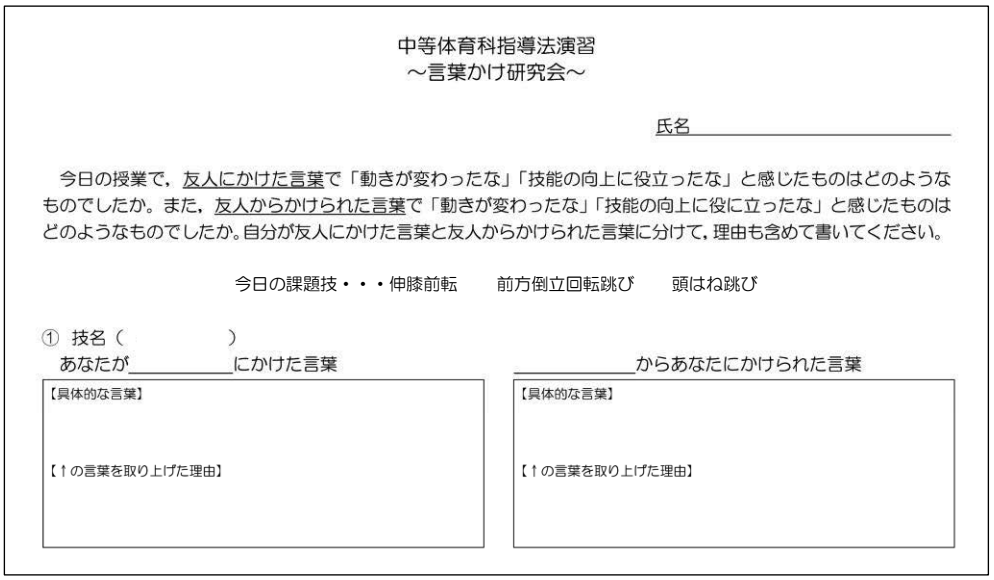
回	授業内容
1	言葉かけ研究会1（Pre）
2	模擬授業①（ハードル走）
3	模擬授業②（ベースボール型）
4	模擬授業③（マット運動）
5	模擬授業④（体つくり運動）
6	模擬授業⑤（走り高跳び）
7	模擬授業⑥（跳び箱運動）
8	言葉かけ研究会2（Post）

2.2　中等体育科指導法演習の概要

中等体育科指導法演習では，実施した模擬授業を教師役，児童・生徒役，観察者役といった多角的な視点から振り返り，よりよい授業へ向けた授業改善の方略を検討することを主たる目的としている．また，受講生は，毎回の模擬授業のあとに，後述する「言葉かけチャレンジ映像」を e ラーニングによって視聴し，授業外の時間を活用した課題に取り組むこととしている．

2.3　「言葉かけ研究会」の概要

模擬授業の前後に実施した 2 回の「言葉かけ研究会」では，器械運動の「伸膝前転（マット運動）」「前方倒立回転跳び（マット運動）」「頭はね跳び（跳び箱運動）」の 3 つの技を取り上げ，受講生同士でその技を指導し合いながら，運動技能の向上に有効であったと感じられた言葉を「自分が友人にかけた言葉」と「自分が友人からかけられた言葉」といった二つの側面からワークシート（図 1）に記述させた．


中等体育科指導法演習
～言葉かけ研究会～

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

今日の授業で，友人にかけた言葉で「動きが変わったな」「技能の向上に役立ったな」と感じたものはどのようなものでしたか。また，友人からかけられた言葉で「動きが変わったな」「技能の向上に役に立ったな」と感じたものはどのようなものでしたか。自分が友人にかけた言葉と友人からかけられた言葉に分けて，理由も含めて書いてください。

今日の課題技・・・伸膝前転　　前方倒立回転跳び　　頭はね跳び

① 技名（　　）

あなたが＿＿＿＿＿にかけた言葉

【具体的な言葉】

【↑の言葉を取り上げた理由】

＿＿＿＿＿からあなたにかけられた言葉

【具体的な言葉】

【↑の言葉を取り上げた理由】

図１　「言葉かけ研究会」で使用したワークシート

2.4　「言葉かけチャレンジ映像」の概要

模擬授業を実施したあとに，eラーニングで受講生に視聴させる「言葉かけチャレンジ映像」は，模擬授業の中で受講生が各種の運動に取り組んでいる場面を抽出したものである．本研究では，「指導ことば」に対する視点を育成する手立てとして，運動技能に改善が必要であると思われる被撮影者（受講生）の動きを映像配信し，映像の中で活動している被撮影者の「A　運動技能の向上を促すオリジナルの言葉かけ」「B　考案した言葉の工夫の視点」「C　運動実施にかかわるつまずきの分析」，以上3つについて，「運動を上手にする『魔法のコトバ』を考えよう！」といったコンセプトの下，「言葉かけチャレンジシート」に記述させた．なお，1回の模擬授業につき，8つの場面を抽出して受講生に視聴させているため，受講生は，それぞれの場面に対して考案したオリジナルの言葉かけを8つ記述している．図2は，「言葉かけチャレンジシート」のフォーマットと記入例を示したものである．受講生は，このフォーマットに従って，「言葉かけチャレンジシート」を作成した．

言葉かけチャレンジシート～運動を上手にする「魔法のコトバ」を考えよう！～

●月▲日の模擬授業　　記入者　○○○○

※場面①～⑧のような学習者に対して，運動を上手にするためにどのような“工夫した言葉”をかけますか。「A 言葉かけの具体的内容」と「B 工夫の視点」を書いて下さい。
また，そのような言葉をかけようと考えたあなたなりの「C つまずきの分析」を記述してください。

場面	A 言葉かけの具体的内容	B 工夫の視点	C つまずきの分析
①	（後方支持回転で）←※これは記入しなくてよい 鉄棒に巻きつくように回転してごらん。ヘビみたいな感じで！	ヘビがぐるっと巻きつくような動きに例えて脚のスイングを表現している。	脚のスイングが弱いために，十分な回転力が得られていないのではないか。
②	（ボールを捕るときに）←※これは記入しなくてよい 卵が飛んできたと思って割らないように捕ってみよう。	ボールの勢いを吸収する柔らかい動作を卵に例えて引き出そうとしている。	捕るときにボールの勢いと反発してしまっているように見える。
③	（走る動きに）←※これは記入しなくてよい ちょっと「ドスンドスン」しているね。「タッタッ」って感じで地面を蹴ろう。	擬音語を用いて走る動きをイメージさせようとしている。	地面に接地する時間が長く，いわゆる「ベタ走り」になっているように見える。
⑧	（走り幅跳びで）←※これは記入しなくてよい 踏み切るときに，おへそを斜め上に突き出そう！	高く跳んでごらんと言うよりも，おへそに意識を集中させて動きを引き出そうとしている	前方向に跳ぼうという意識が強く，ちょっと低空飛行な感じがする。

図２　「言葉かけチャレンジシート」のフォーマットと記入例

2.5　記述内容の分析手続き

「言葉かけ研究会」で使用したワークシートにおける記述内容の分析には，小林（2000）が示した「体育指導における感覚的指導の言葉のカテゴリー」を一部改変したもの（表2）を用いた．具体的には，小林（2000）が作成したものに「4.リズムによる指示」というカテゴリーを新たに追加した．これは，受講生が考案した言葉かけの中に，リズムに着目したものが複数みられたためである．

模擬授業の前後に実施した2回の「言葉かけ研究会」において，受講生がワークシートに記述した内容（運動技能の向上に有効であった言葉）を該当するカテゴリーに分類し，記述内容を比較することとした．なお，記述内容の分類に際しては，客観性および信頼性を確保するために，筆頭著者を含む2名による合議の上で実施した．

３．結果と考察

3.1　言葉かけの変容

表２は，受講生が「言葉かけ研究会」でワークシートに記述した運動技能の向上に有効であった言葉を該当するカテゴリーに分類した結果を示したものである．各カテゴリーに該当する言葉かけを記述していた人数を集計しているので，表中の各カテゴリーにおける最大値は，分析対象者と同数の 34 となる．

ワークシートの記述内容を模擬授業前（Pre）と模擬授業後（Post）で比較したところ，数値の向上がみられたカテゴリーは，「1.意識を焦点化させる指示」の「⑥外部の対象」，「2.比喩によってイメージを育てる指示」の「①動作のイメージ」「②変身のイメージ」「④もののイメージ」，「3.擬音語による指示」，「4.リズムによる指示」であった．これらに分類された具体的な言葉かけの内容を以下に記述する．

表２　「言葉かけ研究会」における記述数

カテゴリー	言葉かけ研究会	
	Pre	Post
1.意識を焦点化させる指示		
①初動時の動作	2	0
②終末時の動作	3	2
③動かしやすい末端の部位	29	26
④動かしたい部位のシンボル	8	3
⑤随伴現象を生み出す部位	5	4
⑥外部の対象	0	4
2.比喩によってイメージを育てる指示		
①動作のイメージ	6	9
②変身のイメージ	0	3
③ものを操作するイメージ	0	0
④もののイメージ	2	5
3.擬音語による指示	2	5
4.リズムによる指示	0	2

(1)　「1.意識を焦点化させる指示」の「⑥外部の対象」

受講生 A は，前方倒立回転跳びにおける言葉かけの内容として，模擬授業前は「着地の時に背中が丸まらないように」と記述していたが，模擬授業後は「二階の窓を見るようにやってごらん」と記述していた．双方とも，着地時の身体の反りについての言葉かけであるが，「背中が丸まらないように」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，後方にある「二階の窓を見るように」といった言葉で望ましい動きを導き出そうとする変化がみられた．二階の窓（図 3 の矢印の方向）といった外部の対象に視線を向けさせることで，着地時の身体の反りを随伴的に生み出そうとする意図をうかがうことができる．



図３　前方倒立回転跳び「二階の窓を見るように」

(2) 「2.比喩によってイメージを育てる指示」の「①動作のイメージ」

受講生Bは，頭はね跳びにおける言葉かけの内容として，模擬授業前は「もっと勢いよくはねてみよう」と記述していたが，模擬授業後は「体育館の二階に跳び上がるように」と記述していた．双方とも，はね動作の勢いについての言葉かけであるが，「もっと勢いよく」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，「二階に跳び上がる」といった言葉で動きのイメージを形成しようとする変化がみられた．二階に跳び上がる（図4の矢印の方向）といった比喩的な表現で，はね動作を生み出そうとする工夫がうかがえる．

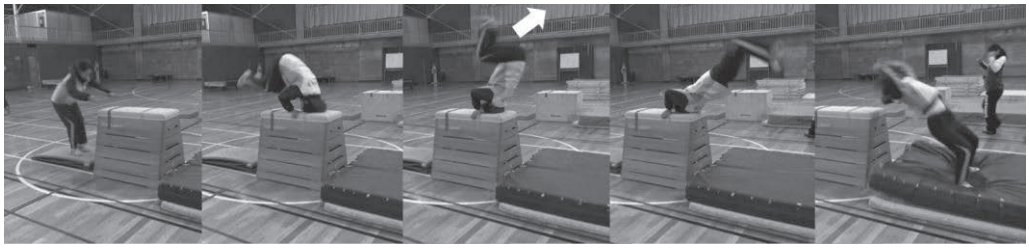


図4　頭はね跳び「体育館の二階に跳び上がるように」

(3) 「2.比喩によってイメージを育てる指示」の「②変身のイメージ」

受講生Cは，伸膝前転における言葉かけの内容として，模擬授業前は「足を強く蹴って」と記述していたが，模擬授業後は「足を大きな風車のように回そう」と記述していた．双方とも，脚の動作に着目した言葉であるが，「足を強く蹴って」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，「大きな風車のように」といった比喩的な表現によって動きのイメージを形成しようとする変化がみられた．風車が回転する様子（図5の矢印）を想像させることで，腰角を大きく保った状態での順次接触を生み出そうとしているのが特徴的である．



図5　伸膝前転「足を大きな風車のように回そう」

(4) 「2.比喩によってイメージを育てる指示」の「④もののイメージ」

受講生Dは，伸膝前転における言葉かけの内容として，模擬授業前は「遠心力をつけてごらん」と記述していたが，模擬授業後は「ここらへん（足元）に水たまりがあるのを思い浮かべてごらん」と記述していた．双方とも，前転の回転力を高めることを意図した言葉であるが，「遠心力をつけて」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，「水たまりがあるのを思い浮かべて」といった比喩的な表現によって動きのイメージを形成しようとする変化がみられた．マットの端に水たまり（図6）を想像させることで着手の位置を遠くし，前転の回転力を高めようとする工夫がうかがえる．



図６　伸膝前転「水たまりがあるのを思い浮かべて」

(5)　「3.擬音語による指示」

受講生 E は，前方倒立回転跳びにおける言葉かけの内容として，模擬授業前は「強くマットを押してみよう」と記述していたが，模擬授業後は「ギュ～じゃなくてギュッ!!と押そう」と記述していた．双方とも，着手の局面に着目した言葉であるが，「強くマットを押して」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，「ギュッ!!と押そう」といった擬音語を用いて望ましい動きを引き出そうとする変化がみられた．腕でマットを押す力強い動き（図 7）を擬音語によって表現しようとしているのが特徴的である．



図７　前方倒立回転跳び「ギュ～じゃなくてギュッ!!」

(6)　「4.リズムによる指示」

受講生 F は，前方倒立回転跳びにおける言葉かけの内容として，模擬授業前は「最後の一歩を大きく踏み出してごらん」と記述していたが，模擬授業後は「最後はタッタタ～ンのリズムを意識して」と記述していた．双方とも，最後の一歩を大きく踏み出すことを意図した言葉であるが，「最後の一歩を大きく踏み出して」といった直接的な動きの改善を示した言葉から，「タッタタ～ン」といったリズムによって望ましい動きを引き出そうとする変化がみられた．抑揚をつけたリズム（図 8 の 3 歩分）で，最後の一歩を大きく踏み出させようする意図をうかがうことができる．



図８　前方倒立回転跳び「タッタタ～ンのリズム」

3.2　言葉かけに変容がみられた受講生の特徴

このように，模擬授業の前後に実施した 2 回の「言葉かけ研究会」において，言葉かけの内容に質的な変化がみられた受講生が認められた．彼らは，「言葉かけ研究会」の間に実施した模擬授業の課題である「言葉かけチャレンジシート」において，どのような記述を行っていたのか，その特徴について考察を進めたい．

表３　記述内容からみた受講生の特徴

パターン	パターンの内容
A	運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であり，それを相手に伝わりやすいような言葉へ再構成しようと試みている．
B	運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であるが，それを相手に伝える際の工夫に課題がある．
C	運動実施にかかわるつまずきの分析が的確でない．

「言葉かけ研究会」の間に実施した 6 回の模擬授業において，e ラーニングを活用した課題である「言葉かけチャレンジシート」の記述内容を分析した結果，表 3 に示す 3 つのパターンに受講生の特徴を区分することができた．パターン A は「運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であり，それを相手に伝わりやすいような言葉へ再構成しようと試みている」，パターン B は「運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であるが，それを相手に伝える際の工夫に課題がある」，パターン C は「運動実施にかかわるつまずきの分析が的確でない」といった特徴である．本研究の対象者 34 名のうち，各パターンに分類された人数は，パターン A が 10 名，パターン B が 18 名，パターン C が 6 名であった．

先に示した，「言葉かけ研究会」において，言葉かけの内容に質的な変化がみられた受講生 A から F までの 6 名は，すべてパターン A に分類された．一方，本研究の対象者が最も多く分類されたのが，パターン B であった．図 9 は，模擬授業 4 回目「体つくり運動」の中で実施した投動作の「言葉かけチャレンジ映像」である．また，この映像に対してパターンＡおよびパターンＢに分類された受講生４名が考案した言葉かけの内容を示した．



	つまずきの分析	言葉かけの具体的内容	工夫の視点
パターンA	足が大きく出てないため力が入っていない	おおきな水たまりをまたぐように投げてみて	水たまりをまたぐイメージで前足を踏み出す動きを引き出そうとした
	踏み込んだ時の重心が後ろにあるように思える	前に力強く「グッ」と踏み込んでみよう	体の使い方をイメージしやすいように擬音語を使った
パターンB	前足の踏み出しが不十分である	もう少し左足を前に着いてみよう	踏み出す足に意識が向くようにしている
	体重が十分に前に乗っていない	腕の振りはＯＫだから前足に体重を乗せよう	いいところをほめつつ少し改善点を加える

図９　「言葉かけチャレンジ映像」とパターンＡおよびＢの受講生の言葉かけ

被撮影者である受講生の投動作を観察すると，動作の終末局面において，踏み出した足に十分に体重が乗り切れていない様子がうかがえる．パターン A およびパターン B に分類された 4 名とも，「つまずきの分析」については，このことと全く同じ意味内容が記載されていた．しかし，考案した「具体的な言葉かけ」では，パターン A に分類された受講生 2 名は，「おおきな水たまりをまたぐように投げてみて」「前に力強く『グッ』と踏み込んでみよう」といった比喩表現や擬音語を用いていたのに対し，パターン B に分類された受講生 2 名は，「もう少し左足を前に着いてみよう」「腕の振りは OK だから前足に体重を乗せよう」といった直接的な動きの改善を指示する言葉に留まっていた．そして，このような違いを生み出したのが「工夫の視点」である．パターン A に分類された 2 名は，ともに「イメージ」という用語を用い，それを手がかりに望ましい動きを引き出そうとする意図を感じ取ることができる．このような学習者への伝達性という面からの違いが，考案した言葉かけの違いを生み出していたと考えられる．したがって，「言葉かけ研究会」の間に実施した 6 回の模擬授業の課題として視聴させた「言葉かけチャレンジ映像」において，運動実施にかかわるつまずきの分析を的確に行うことができ，さらにそれを相手に伝わりやすいような言葉へ再構成しようと試みている受講生は，「指導ことば」に対する認識を高めることができたものと考えられる．

しかしながら，パターン B に分類された受講生のように，運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であっても，それを相手に伝わりやすいような言葉へ再構成しようとすることに一つのハードルが存在しているものと考えられる．彼らに対しては，学習者のつまずきを適切な運動技能へと修正しようとするプロセスにおいて，伝達性のある言葉を生み出していくことに向けた手立てを講じる必要があると考えられるだろう．このことについては，今後の研究課題として追究していく余地があるといえる．さらに，パターン C に分類された者も，少数ではあるが 6 名存在していた．彼らに対しては，学習者のつまずきを把握するための運動観察の力の育成や運動の構造や仕組みについてより一層理解させることが必要であるといえよう．このことは，教科教育科目と教科専門科目のより強固な連携の必要性を示しているともいえる．今後の課題としたい．

4．まとめ

本実践研究では，子どもが運動を感覚的に理解したり，運動課題の解決に向けたイメージを膨らませたりすることができる「指導ことば」に着目し，それに対する視点の育成を意図した教科教育科目におけるeラーニング活用の効果を検証することを目的とした．

「指導ことば」に対する視点を育成する手立てとして，模擬授業を実施したあとに，運動技能に改善が必要と思われる受講生の動きを撮影した「言葉かけチャレンジ映像」をeラーニングによって配信し，映像の中で活動している受講生の「A　運動技能の向上を促すオリジナルの言葉かけ」「B　考案した言葉の工夫の視点」「C　運動実施にかかわるつまずきの分析」，以上3つを「言葉かけチャレンジシート」に記述させた．そして，模擬授業の

前後に実施した「言葉かけ研究会」で受講生がワークシートに記述した運動技能の向上に有効であった言葉を比較・分析した．本研究で得られた結果は，以下のとおりである．

①模擬授業の前後に実施した「言葉かけ研究会」において，受講者の言葉かけに質的な変容がみられた．したがって，eラーニングによって言葉かけの模擬体験を行うといった課題は，「指導ことば」に対する視点を育成していく上で，一定の効果を有したものであるといえる．

②言葉かけに質的な変容がみられた受講生は，運動実施にかかわるつまずきの分析が的確であり，それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようと試みていることが明らかになった．

③つまずきの分析が的確であっても，それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようとするところに課題が存在していることが明らかになった．また，つまずきの分析が的確でない受講生も少なからず存在していた。「指導ことば」を生み出していくことに向けた手立てとともに，運動観察の力や運動構造の理解といった専門的な力量を形成していくことの必要性が示唆された．

付記

本研究は，日本教育メディア学会2016年度第2回研究会における研究報告（藤田・高山2017）を加筆・修正したものである．

文献

浅井雅大，藤田育郎，2016，教員養成段階の保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴：e-Learning による体育模擬授業のリフレクション課題を通して，信州大学教育学部研究論集，9，pp.71-79

藤田育郎，高山幸一，2017，体育授業における「指導ことば」に対する視点の育成：教科教育法の模擬授業における e ラーニング活用の効果，日本教育メディア学会研究論集，42，pp.1-4

深見英一郎，髙橋健夫，日野克博，吉野聡，1997，体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討：特に，子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に，体育学研究，42(3)，pp.167-179

岩田靖，藤田育郎，2017，運動学習の促進に向けた「指導言語」の有用性に関する積極的体験：教員養成段階の実技演習における事例的検討，長野体育学研究，23，pp.19-29

小林篤，2000，体育の授業づくりと授業研究，大修館書店，東京，pp.150-180

髙橋健夫，岡沢祥訓，中井隆司，芳本真，1991，体育授業における教師行動に関する研究：教師行動の構造と児童の授業評価との関係，体育学研究，36(3)，pp.193-208

（2017 年 5 月 24 日　受付）